

荔支嘆

荔支嘆

紹聖二年（一〇九五）、六十歳 惠州に在って作る。

1 十里一置飛塵灰 十里に一置塵灰を飛ばし

2 五里一堠兵火催 五里に一堠兵火催す

3 顛坑仆谷相枕藉 坑に顛り谷に仆れて相枕藉す

4 知是荔支龍眼來 知ぬ是れ荔支龍眼の來れることを

5 飛車跨山鵲橫海 飛車山に跨り鵲海を横ぎり

6 風枝露葉如新採 風枝露葉新に採るが如し

7 宮中美人一破顔 宮中の美人一たび破顔

8 驚塵濺血流千載 驚塵血を濺いで千載に流る

9 永元荔支來交州 永元の荔支は交州より來たり

10 天寶歲貢取之涪 天寶の歲貢は之を涪に取る

11 至今欲食林甫肉 今に至るまで食はんと欲す 林甫が肉

12 無人舉觴酌伯游※ 人の觴を挙げて伯游を酌する無し

13 我願天公憐赤子 我は願ふ天公赤子を憐れみ

14 莫生尤物爲瘡瘡 尤物を生じて瘡瘡を為すこと莫く

15 雨順風調百穀登 雨は順に風は調うて百穀登り

16 民不飢寒爲上瑞 民飢寒せざるを 上瑞と為さんことを

※漢永元中交州進荔支龍眼，十里一置，五里一堠，奔騰死亡，罹猛獸毒蟲之害者無數。唐羌字伯游，為臨武長，上書言狀，和帝罷之。唐天寶中，蓋取涪州荔支，自子午谷路進入。

漢の永元中 交州 荔支 龍眼を進む。十里に一置、五里に一堠、奔騰して死亡

するもの、猛獸 毒虫の害に罹る者 無數なり。唐羌 字は伯游、臨武の長と為り、

上書して狀を言ひ、和帝、之を罷む。唐の天寶中は、蓋し涪州の荔支を取れり。

子午谷路自ら進入す。

【語釈】○置：駅伝の馬をのりつぐ駅舎。十里ごとに置かれた。○堠：ものみ。五里ごとに置き、烽火をあげる。○風枝露葉の句：白居易の荔枝図序に「如し本枝を離るれば、一日にして色変ず、二日にして香変ず、三日にして味変ず、四五日の外、香色味尽く去る。」○伯游：後漢の唐羌の字、臨武(湖南省)の令となり、交州に接する県で、竜眼・荔枝の伝送がここを経由し、惨状を見るに忍びず、上書して諫言を奉ると、天子は詔を出して進献を受けないようにさせられ、事は止んだ。(和帝紀)○赤子：人民をいう。○瘡瘡：瘡はきず、瘡は鍼のきず。憂患の意。○上瑞：天が異常なものを生じて、祥(めでたいしるし)を示すのを瑞という。○子午谷：長安の南、秦嶺の谷で漢魏時代から蜀へ入る交通路の一つ。

【通釈】十里ごとの宿場に塵灰があがり、五里ごとの堠ものみにのろしが上がる。穴に頭から落ちこんだもの、谷にたおれふしたもの、互いに枕してよりかかるようにして死んでいる。これこそ荔枝と竜眼がみやこへ送られてくる時のさわぎなのである。(漢の永元中のこと)。

天かける車がひとまたぎに山を越え、鶻はやぶさがひととびに海を横ぎるような早さ。みやこに到着したとき、まだ風にそよぐ枝も露のおいた葉もそのまま、今しがた採取したばかりと見える。宮中の美人の破顔一笑をかうために、砂塵をまいあげ、鮮血は千年のちにまでそそがれたのである。(唐の天宝中のこと)。

漢の永元の時の荔枝は、交州から送って来させたのだった。唐の天宝のとき、歳貢としての荔枝は、涪州から取りよせたのだった。今日に至るまで李林逋の肉を食べてやろうとまで思う人のある一面、杯を挙げ酒を地にそそいで、かの唐伯游を祀る人は誰もいない。

わたくしは天の神様をお願いする。なにとぞ自分が産み落としたもうた赤子に憐みをかけたまい、このうえ珍奇なものをこの世に送りこんで、人民の苦しみのたねを蒔きたまうことのないよう、そして雨も風も順調で、百穀がよくみのり、民は飢えも凍えもせぬという、めでたいしるしをくだしたまわらんことを。